

イエスの聖テレサ（アヴィラの聖テレジア）の小品集『神愛考』

Conceptos del Amor de Dios

『神愛考』という作品は、サブタイトルとして『雅歌についての黙想』となっています。この雅歌は旧約聖書の『雅歌』です。

この作品は、ある研究者によると 1571 年から 1574 年にかけて、アビラのエンカルナシオン修道院の院長時代に作られたであろうということです（参考図書 No.3 に記述）。この時期は、サラマンカ大学の学者であり、アウグスチノ会士であるルイス・デ・レオン師がカスティリャ語（スペイン語）に『雅歌』を翻訳した時期と重なっています。実は、ルイスはこの翻訳のためにヴァリャドリドの牢屋に入ることになります。その理由は 1559 年の異端審問所のヴァルデスの禁書目録の内容に触れるものでしたが、この翻訳によってルイス師は数年間の牢生活をするようになります。『雅歌』はカトリック教会内でも男女の恋愛ものとして解釈する危険な書物としてみていました。しかし、この『雅歌』をもとに別の詩を作った聖人もいました。テレサの協力者である十字架の聖ヨハネです。彼は 1577 年から 1578 年のトレドの修道院の牢で、『霊の賛歌』の中の詩を作成していますが、その基となっているのが『雅歌』です。

この時期にテレサがこの作品を作成したことに貴重な資料としての価値をわたしたちは見えています。1562 年にテレサ的カルメルの最初の修道院が創立された後、『自叙伝』、『完徳の道』、『最初の会憲』という作品が 1567 年に整えられますが、その後の作品が 1573 年から執筆活動が始まる『創立史』となります。1577 年には、彼女の霊性書の総括といわれる『靈魂の城』が書かれますが、この間に彼女の内面の霊的進歩がありました。その大きな出来事が、「霊的婚姻」です。彼女の報告によりますと 1572 年 11 月 18 日となっています（参考図書 No.1：霊的報告参照）。この「霊的婚姻」という表現をもって神との一致を表現した基に『雅歌』の花婿と花嫁の関係があります。

しかし、この作品のオリジナルは、テレサの手によって焼かれました。現在、私たちの時代に残されてきたのは、カルメリットたちがコピーしたものを継ぎ合わせたものです。それでも作品の半分は消失されたといわれています。なぜ、聖女はこの作品を焼いてしまったのでしょうか。その理由は従順です。彼女は多くのドミニコ会士の友人や聴罪師を持っていました。ドミンゴ・バニェス師、ガルシア・トレド師、ペドロ・フェルナンデス師など。彼女が 1574 年にセゴビ

アで修道院創立のために、セゴビアを訪れた時、別のドミニコ会士と出会います。ディエゴ・デ・ヤングアス師です。彼が彼女のこの作品を見た時の評価は、「『雅歌』を一人の女性がこのように解釈するのは節操がない」ということで、テレサに焼却命令を出しました。テレサは従順にこの命令に従い、オリジナル原稿を焼いてしまいました。しかし、ヤングアス師の友人でもありテレサ聴罪司祭でもあったドミンゴ・バニェス師は、この作品を手にしたとき、「正しい、有益な教えが含まれている」と評価し、彼の自筆サインを書き添えました（1575年6月10日、ヴァリャドリドにて）。このヤングアス師は、後にテレサの『靈魂の城』の検閲にもグラシアン神父と共に行うこととなります（1580年）。

ではこのテキストの内容は何が書いてあり、何を読み取れるでしょうか。実にテレサは花婿と花嫁の愛の物語である『雅歌』を黙想しながら、神と靈魂の間の「祈りの道」を考察しています。この作品のあて先がカルメリットたちですし、彼女たちの念祷生活に役に立てばと言うことで作成されました。また、この作品の動機は彼女だけにあるのではなく、ある人の従順によって書かれています。「わたしにとって従う義務のあるかたがたのご意見に従い、・・・書き記してみましよう」（神愛考：序：3）。「わたしはただ、ご命令なされたかたに従うためにこれを書いたにすぎませんが、・・・」（神愛考：7：10）。

この作品の祈りについての構成は次のようになります。

- 1) 第一章：どのようにして、この『雅歌』の作品に近づき、読むべきか。
- 2) 第二・三章：「わたしに口づけしてくださる」ことによって、得られる平和と友愛。
- 3) 第四・五章：静穩の神秘的祈りと一致の祈りについて。
- 4) 第六章：祈りとエクスタシーについて
- 5) 第七章：教会のための一致の祈りによる実り

この内容から読み取れますことは、第五章までは『自叙伝』、『完徳の道』の継続と見ることはできますが、第六章の最後になりますと「王はわたしの中に愛を整えられた」の説明で、無秩序な自己愛が神の愛に飲み込まれて神の愛の秩序に変えられる体験の報告になります。この部分は『自叙伝』の20章から21

章に別の視点で説明していますが、そのときよりも理性的でよりはっきりとしています。この時点から彼女の神体験によるエクスタシーが止まります。

また、この作品の内容と彼女の体験報告との関わりから、1571年のサラマンカの復活祭の体験に言及しています（神愛考：7：2参照）。この体験は、神の愛による「わたしの死の体験」の報告でもあります。また、別の観点からはテレサ的暗夜の報告ともいわれています。この部分が、後の『靈魂の城』を作成するに当たり大きなデータとなるでしょう。

もう一つの視点は、テレサが聖母マリアに対する孝愛の視点を持っていることです。第六章の8番に、聖母マリアの聖務に注意を向けていることです。聖母の体験を黙想しながら、自分の体験を考察しています。この報告は、1571年のサラマンカの体験にも出てきます。テレサも聖母の娘であることがわかるでしょう。

最後に、この作品は1611年にベルギーでグラシアン師によって出版されます。ベルギーでのグラシアン師によるテレサの作品の出版活動は、1614年のテレサの教会の列福に大きな貢献をすることになるでしょう。

<参考図書>

1. イエズスの聖テレジア『小品集』、東京女子カルメル会・福岡女子おカルメル会訳、ドン・ボスコ社、1993年
2. TERESA DE JESÚS, *Obras completas*, Ed. Monte Carmelo, Burgos 2004, preparada por Alvarez Tomas
3. Alvarez Tomas, 100 fichas sobre TERESA DE JESUS, Burgos 2007